「桃花源記」における読みの変化について

―関連教材「桃花源詩」の利用とその効果―

土屋　聡

一、関連教材をめぐる現状と本稿の目的

本稿は、陶淵明「桃花源記」を読むに際して、補助的な関連教材として「桃花源詩」を取り入れた場合に、学習者の読みがどのように変化するか、ということを実践的に調査したものである。[1]

平成30年告示「高等学校学習指導要領」には、

作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。（45頁。古典探究）

とあり、同「解説 国語編」において、

他の作品などとは、同じ時代に書かれた他の作品や、同じ題材やテーマをもつ異なる時代に書かれた他の作品のことである。作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえる必要があるのは、成立の背景に着目することで、作品の内容の解釈を深めることが可能になることが多いためである。また、古典の作品は、他の作品を踏まえて成立することも多いため、作品や文章との関係を押さえることが必要となる。（261頁）

と説明されているように、古典については「他の作品」との関係の中で作品を理解する必要性が明示されている。もちろん、漢文学と日本古典文学あるいは漢文学と日本近現代文学、中国の漢文学と日本の漢文学など、様々な「作品や文章との関係」が考えられるのであるが、漢文教材そのものの理解を深めるために「他の作品」を利用することは、意外にも従来ほとんどなされてこなかった。[2]

ところで、関連教材を利用した古典学習は、中華人民共和国においても行なわれている。中国国外で唯一入手可能な人民教育出版社版の教科書を見てみると、教科書本文の後に附された「研究討論と練習（研討与練習）」の設問には関連教材を利用したものが一定数見られる。[3]従来の研究では、関連教材の利用には生徒の自主性を育成するという

目的があると指摘されている（胡雲二〇二〇、路亜存二〇二二）[4]。また、筆者も教科書教材と関連教材との関係を分析し、読解のための比較対象として、あるいは読解に必要な視点を提供するものとして、関連教材は学習者の主体的な学びを補助するであろう、ということを指摘した[5]。しかし、実際に学習者が独力で教科書教材を読むに際して、関連教材は具体的にどのように寄与するであろうか。この点については未詳である。

そこで、本稿では「記」をひとつの事例として取り上げ、「記」のみを読む場合と、関連教材として「詩」を加えて読んだ場合とにおける読みの変化を調査した。

二、調査の方法と対象者

「記」における創作性や虚構性については既に議論のあるところであるが、本稿では深く立ち入らない[6]。ただ、多くの教科書が文体としての「記」を事実の記録であると説明していることに従い、作者陶淵明による不思議な村の記録として扱う、というのが本稿の立場である[7]。したがって、「記」に作者の表現上の工夫や叙述の巧みさを見出すことはできるが、記録として残したということ以外にその思想や撰述意図までをも読みとることは困難である。一方、「詩」は作者陶淵明が「記」を素材として桃花源に遊ぶ空想を繰り広げたものであり、そこには作者の思想や価値観が表れていると考えられる[8]。このように「記」と「詩」との性格が截然と分かれている点が、本稿で取り上げる主要な理由である。

調査対象者は、筆者が担当するふたつの講義の受講生である[9]。クラス1は1年生19名を中心とする32名であり、うち22名が国語教育を専攻している。また、クラス2は2年生8名を中心とする12名であり、うち10名が国語教育の専攻である。彼らは、国立大学の大学生であり且つ教員養成の学部に所属しているということもあり、ある程度の学力と意欲とを備えている。

したがって、本研究の結果を以て高校生一般における効果を推測できるわけではないが、今回の調査目的は「詩」によってどのように読みが変化するのかということを検証する点にあり、その意味では「詩」を利用した高校国語の授業を構想する場合にも参考になるのではないか、と考えている。

調査は次のように行なった。

1、授業者（筆者）が「記」のあらすじや表現上の特色、「詩」との関係についての説明を行なった。

2、学習者（受講生）が各自で「桃花源記」本文（書き下し文・現代語訳を附す）を読み、ワークシート（1）～（4）への記入を行なった。

3、授業者が「詩」のあらすじや表現上の特色について

の説明を行なった。

4、学習者（受講生）は「詩」本文（書き下し文・現代語訳を附す）を各自で読み、ワークシート（5）～（8）への記入を行なった。

5、学習者は自分が記入したワークシートを踏まえてアンケートに回答した。

なお紙幅の都合上、ワークシート・アンケートの項目内容は次節に記す。

三、ワークシートおよびアンケートの分析

三―一、桃花源の生活について

桃花源の村の生活を想像してその魅力を味わうことは、単に物語の舞台を知るということに留まらず、漁人をはじめとする登場人物の心理や言動を理解する上でも重要と思われるため、ワークシート（1）は「記」の第二段落を読んで桃花源の村の様子を想像させる設問とし、（5）は「詩」の第7～24句を読んで想像をさらに広げさせる設問とした。

（1）桃花源の村の人々がどのような生活をしているかについて、第二段落の記述から想像してなるべく詳しく説明して下さい。

（5）「詩」の第7～24句は、桃花源の村の人々がどのような生活をしているかについて、陶淵明自身が想像をしたものです。これを読んだ上で（1）でのあなたの想像をさらに広げてなるべく詳しく説明して下さい。

今回、学生に提示した「記」の第二段落は、次の通りである。[10]

土地平曠、屋舍儼然、有良田美池桑竹之属。阡陌交通、鶏犬相聞。其中往来種作、男女衣著、悉如外人。黄髪垂髫、並怡然自楽。

土地 平曠に、屋舍 儼然として、良田美池桑竹の属ひ有り。阡陌 交り通じ、鶏犬 相ひ聞ゆ。其の中に往来し種作する、男女の衣著は、悉ごとく外人の如し。黄髪垂髫、並に怡然として自ら楽しむ。

土地は平坦でどこまでも広がり、家々は整然と建てられ、豊かな田畑や美しい池があり、桑や竹などが生えている。あぜ道が縦横に交わり、鶏や犬の声が聞こえる。そこに行き来して種まきをしたり耕したりしている男女の服装は、外部の人と同じようである。白髪の老人もおさげの子どもも、みな楽しそうであった。

また、「詩」の第7～24句は次の通り。

7　相命肆農耕　　相ひ命じて農耕に肆め
8　日入従所憩　　日 入りて 憩ふ所に従ふ
9　桑竹垂余蔭　　桑竹 余蔭を垂れ
10　菽稷随時芸　　菽稷 時に随ひて芸う
11　春蚕収長糸　　春蚕 長糸を収め

12 秋熟靡王税　秋熟 王税 靡し
13 荒路曖交通　荒路 曖として交はり通じ
14 鶏犬互鳴吠　鶏犬 互ひに鳴吠す
15 俎豆猶古法　俎豆 猶ほ古法にして
16 衣裳無新製　衣裳 新製 無し
17 童孺縱行歌　童孺 縱に行くゆく歌ひ
18 斑白歓游詣　斑白 歓しみつつ游び詣る
19 草栄識節和　草 栄えて 節の和ぐを識り
20 木衰知風厲　木 衰へて 風の厲さを知る
21 雖無紀歴志　紀歴の志 無しと雖も
22 四時自成歳　四時 自ら歳を成す
23 怡然有余楽　怡然として余かなる楽み有り
24 于何労智慧　何に于いてか智慧を労さん

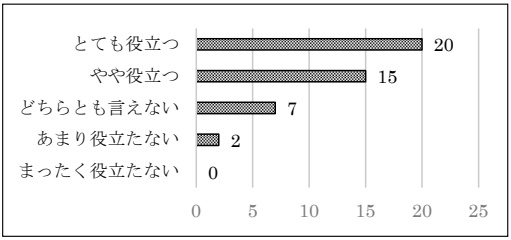
たがいに声をかけあって農耕にはげみ、日が沈むと思い思いに休憩する。桑や竹はよく育って大きな木陰をつくり、豆や粟は季節に応じて植えられる。春のカイコからは長い生糸がとれ、秋の収穫には天子さまへの年貢がかからない。草深い道は見え隠れしながら縦横に行きかい、鶏や犬はそれぞれ鳴いたり吠えたりしている。儀式や食事の器は昔ながらのものを使い、衣服も新しい意匠のものは無い。子どもたちは自由に遊び歌い、老人たちは楽しげに訪ねあう。草木が花を咲かせると気候が穏やかになることをさとり、木々が枯れると風が冷たくなることを知る。暦は無くとも、四季はめぐる。ここは安らかでたくさんの楽しみがあるのだから、どうして小賢しい知恵を働かせる必要があるだろうか。

表１　桃花源の生活についての想像　※のべ人数（名）

	項　　目	（1）	（5）
1	景色が美しいこと	15	5
2	土地が肥えていること	1	1
3	産物が豊富であること	3	6
4	生活習慣が淳朴であること	0	16
5	社会が平等であること	8	9
6	戦争や迫害がないこと	6	6
7	重税がないこと	0	5
8	自給自足の生活をしていること	18	26
9	生活が平和で楽しいこと	14	17

さて、筆者は前稿において、既に「詩」を利用している中国の教科書を参照しながら、村の魅力について９つの項目に分けて整理した。[11] ここでもその項目を用いて解答を分析したい。表１は、ワークシート（１）（５）それぞれについて、各項目に該当する解答をしたのべ人数をまとめたものである。「記」のみを読んだ（１）の段階では１、「景色が美しいこと」、８、「自給自足の生活をしている

図1　アンケートQ1：村の生活を想像することは「漁人」ほか登場人物の理解に役立つか（クラス1・2合算）



こと」、9、「生活が平和で楽しいこと」を想像した者が多かった。一方、「詩」を読んだ後の（5）では、1が減少した代わりに4、「生活習慣が淳朴であること」を想像した者が増加した。確かに、「詩」にはのんびりと働く村人の日常や伝統を守った生活様式などが描かれており、それらの描写によって想像をふくらませたものと見てよいであろう。ちなみに、「詩」のみに記述が見られるものとしては他に3・7があり、（5）の解答では増加することが予想されたが、実際には微増にとどまった。

ところで、8、「自給自足の生活をしていること」については、微増していることもさることながら、（1）では田畑や池、住宅、鶏犬など物質的な面についての記述が主になされており、（5）では「詩」の第7・8句「相ひ命じて農耕に肆め、日入りて憩ふ所に従ふ」などに着目した村人の生活という面からの記述がなされる傾向が見られた。この点も「詩」を読んだことによる変化と考えられる。

アンケート（Q1）では、村の様子や村人の生活をより詳しく想像することは「漁人」「太守」「劉子驥」らの心情や行動を理解することに役立つと思うか、という質問をした。図1の結果からすれば、学習者は概ね村の生活を想像することの重要性に気づいていると言えよう。このことに関連して特筆しておきたいことがある。それは、表1には反映されていないことであるが、（5）の解答の中に桃花源に住む村人の人間性への言及があったことである（全44名のうち13名）。素朴で善良な村人の性格が豊かで余裕ある生活によって形成されたものであると気づいたとすれば、それは狡知をめぐらす「漁人」やその背後にいる「太守」（ともに俗世を代表する存在）との対比や、村に憧れる劉子驥の心情理解を容易にすると考えられるのである。[12]

三―二、作者が関心を持った人物

「記」では、桃の花が咲き誇る林に迷いこんだ「漁人」が洞窟を通って不思議な村を発見し、村人に歓待を受けるも、別れに際して秘密の保持を頼まれる。しかし、「漁人」は太守に村の存在を報せ、再訪を企てるが失敗する、という筋書きであり、主人公を「漁人」とすることに恐らく異論はないであろう。

しかしながら、より広い視野に立って「記」全体を俯瞰的に捉えるためには、「主人公＝漁人」の視点から読むの

みでは不充分である。そこで学習者には、作者が関心を持っていた人物は誰かと問うことによって、「主人公＝漁人」とは異なるもうひとつの視点を与えようと考えた。

（2）「桃花源記」の中で、陶淵明が最も関心を持っていた人物は誰だと思うか。あなたの考えを理由とともに答えて下さい。

（6）「詩」を読んだ上で（2）「陶淵明が最も関心を持っていた人物は誰だと思うか」の回答を変更したり補足したりする場合は、あらためて答えて下さい。

ワークシート（2）の段階で「漁人」と回答した者は全44名のうち21名であり、約半数を占めた。このうち16名がワークシート（6）で回答を「村人」に変更した。また、はじめ「太守」や「劉子驥」と回答していたが「詩」を読んで「村人」に変更した者が7名、はじめから「村人」と回答し変更しなかった者が9名おり、最終的に32名が「村人」と回答することになった。

この結果は、恐らく「詩」の内容に起因するであろう。「詩」は村人の祖先が秦末の乱世を避けて姿を消すところから詠い起こされる。

1　嬴氏乱天紀　　嬴氏 天紀を乱し
2　賢者避其世　　賢者 其の世を避く
3　黄綺之商山　　黄綺 商山に之(ゆ)き
4　伊人亦云逝　　伊(こ)の人も亦(ま)た云(こ)に逝(ゆ)く
5　往跡浸復湮　　往きし跡は浸(やうや)く復(ま)た湮(うづも)れ
6　来径遂蕪廃　　来たれる径(みち)も遂に蕪廃す

むかし秦の始皇帝が平和を乱し、賢者たちはその乱れた世を避けた。夏黄公や綺里季は商山に向かい、この人々もまた逃れた。彼らが歩んだ足跡は次第に埋もれ、彼らが通ってきた道はそのまま荒れ果ててしまった。

また、三－一に挙げた第7～24句は全て村人の生活を描くものであり、「詩」の中核を成している。

さらに「詩」の結びは、

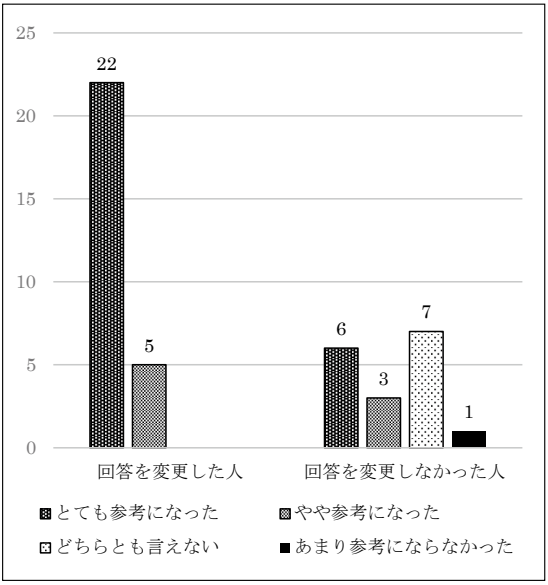
31　願言躡軽風　　願はくは言(こ)に軽風を躡(ふ)み
32　高挙尋吾契　　高く挙がりて吾が契を尋ねん

願わくは疾風に乗り、空高く飛んで私の心にかなうあの人々を訪ねたいものだ。

とあるように、桃花源の人々を訪ねたいという作者の願望が述べられている。作者の関心が村人にあったことは、疑いようのないところである。

なお、この問いに係るアンケートでは、「詩」を読むことが考えを形成する上で参考になったか（Q2）と質問した。図2は、「詩」を読んで回答を変更した人と変更しなかった人とに分けて集計したものである。回答を変更した人は、全員が「とても参考になった」「やや参考になった」と回答しており、「詩」が回答の変更に有効に働いたこと

図２　アンケートＱ２：回答の変更と「詩」参考の程度
（クラス１・２合算）



が窺われる。

三－三、再訪不能に対する作者の見解

村を出た後、漁師は自分の船を見つけて、もと来た道を戻ったが、あちこちに目印をつけておいた。武陵郡のまちに着くと、太守に自分の体験を話した。太守は部下に命じて漁師に同行させ、さきにつけた目印を辿らせたが、彼らは道に迷ってしまって村を見つけることができなかったという。これは「記」における最大の謎、すなわち村への再訪ができなくなるという場面である。この謎に対して学習者はどのように向き合うであろうか、ということを見るために次のような問いを設けた。

（3）村を出た漁師は、なぜ再び村に戻ることができなくなったのか。本文の中から根拠となる記述を抜きだして、あなたの考えを答えて下さい。

（7）（3）「村を出た漁師は、なぜ再び村に戻ることができなくなったのか」について、陶淵明はどのように考えているか、「詩」の中から根拠となる記述を抜きだして答えて下さい。また、あなたはその考えをどう思うか答えて下さい。

ワークシート（3）では、「漁人」が村人との約束を破ったことに起因すると回答した者が多数を占めた（全44名のうち32名）。これは村を出た後の「漁人」の言動を見れば、妥当な結果と言えよう。しかし、問題は彼らが本文から抜きだした「根拠となる記述」にある。確かに「記」には次のような記述がある。

○村人が「漁人」に対して、村の存在を他言しないように依頼したこと。

停数日、辞去。此中人語云「不足為外人道也」。

停まること数日にして辞去す。此の中の人語げて云ふ「外人の為に道ふに足らず」と。

漁師は数日とどまった後でいとまごいをした。この村の人々は「外の人には何もお話しなさらないように」と告げた。

○「漁人」が帰り道に目印をつけておいたこと。

既出、得其船、便扶向路、処処誌之。及郡下

既に出で、其の船を得て、便ち向の路に扶り、処処にこれを誌す。

そこを出た後で、漁師は自分の船を見つけると、もと来た道をたどって戻ったが、あちこちに目印をつけておいた。

○太守に村の存在を告げたこと

及郡下、詣太守、説如此。

郡下に及び、太守に詣り、説くこと此くの如し。

武陵郡のまちに着くと、太守のもとに参上し、このようなことがあったと話した。

○目印を辿ったが再訪できなかったこと。

太守即遣人随其往、尋向所誌、遂迷不復得路。

太守 即ち人を遣はして其の往くに随ひ、向に誌す所を尋ねしむるも、遂に迷ひて復た路を得ず。

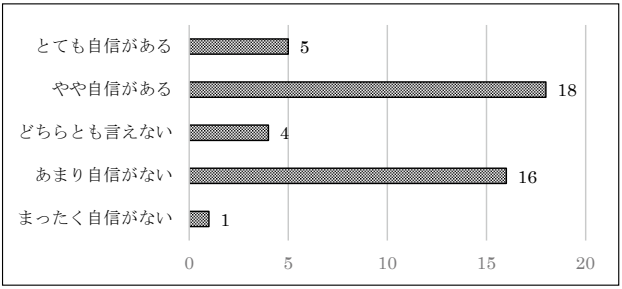
太守はすぐに部下に命じて、漁師のあとについて行かせ、さきにつけた目印を辿らせたが、そのまま迷ってしまって道を見つけることはできなかった。

学習者は、おおむね以上の記述を根拠として挙げていたのである。しかし、これらは出来事を記したものではあるが、「なぜ戻ることができなくなったのか」という理由を説明するものではない。アンケート（Q3）の結果は図3のように自信のあるなしが相半ばする双峰型を示した。このことは、「記」本文から根拠を探し出したことに対して、半数近くが懐疑的であることを意味する。

実は「記」と時代を同じくする志怪小説では怪異のみを記して、その原因や理由について説明がなされないのは普通のことなのである[13]。今回の調査ではワークシートの指示も影響しているであろうが、学習者側に志怪小説を読んだ経験が不足していれば、本文中の関連のありそうな記述を、無理に根拠と見なしてしまうことは致し方ないことである。

さて、本文の中に根拠がないとすれば、「なぜ戻ること

図3　アンケートQ3:「桃花源記」から抜きだした根拠に自信はあるか（クラス1・2合算）



ができなくなったのか」については作者陶淵明の見解を尋ねる他はない。ワークシート（7）はそのことを企図したものであり、ほぼ全員が「詩」の第27・28句「淳薄 既に源を異にし、旋ちにして復た幽蔽に還る（淳薄既異源、旋復還幽蔽）」を抜きだした。この句において作者は、村人の淳朴さと「漁人」に代表される俗世の浮薄さとが、もはや相容れないほどに懸絶していることが、村の消失（すなわち「漁人」が再訪不能になったこと）に関わっている、と捉えている。[14] もちろん、この句も再訪不能となった仕組みを解明したものではないのであるが、このような作者の見解を通じて「記」を読む時、学習者はそこに桃花源と俗世との対立の構図を見出すことになると思われる。

三―四、作者の主張について

最後に、学習者が「桃花源記」の撰述意図をどのように考えたか、またそれは「詩」によってどのように変化したかを調べるため、次のような問いを立てた。

（4）陶淵明は「桃花源記」を書くことによって、何を主張しようとしたのか。あなたの考えを理由とともに答えて下さい。

（8）（4）「陶淵明は『桃花源記』を書くことによって、何を主張しようとしたのか」について、「詩」で陶淵明が述べていることを踏まえて、あらためて、あなたの考えを理由とともに答えて下さい。

表2はワークシート（4）（8）の記述を集計し、人数の多かった上位5項目を挙げたものである。複数の項目にかかる回答が多かったため、のべ人数によって集計している。

表2　陶淵明は何を主張しようとしたか　※のべ人数（名）

	項　　目	（4）	（8）
1	約束を破ることはよくない	15	0
2	欲を出すことはよくない	12	0
3	理想郷・隠逸への憧れ	7	16
4	俗世に対する批判	4	22
5	純粋さ・淳朴さへの憧れ	0	7

これに拠れば、（4）すなわち「記」のみを読んだ時点では、「漁人」の裏切りに着目して「約束を破ることはよくない」、「欲を出すことはよくない」とする者が多かったことが判る。ところが、「詩」を読んだ後の（8）では、これらの回答は姿を消し、「俗世に対する批判」とする者が多数を占めた。

確かに「記」を読み進めてゆくと、村を出て太守に密告をする場面で、我々は「漁人」に対する反発や落胆を感じてしまう。その場合、「記」は「約束を破ることはよくない」「欲を出すことはよくない」というごく常識的な教訓を与える寓話として我々の目に映る。

もちろん、「記」にそのような

側面がないとは言えないが、「詩」においてはやや異なる方向に注意が向けられている。

第23・24句「怡然として余かなる楽み有り、何に于いてか智慧を労さん（怡然有余楽、于何労智慧）」における「智慧」は『老子』十八章の「大道 廃れて、仁義有り。智慧出でて、大偽有り（大道廃、有仁義。智慧出、有大偽）」を踏まえたものであって、欺瞞や詐偽を意味する。

また、前項で述べたように第27・28句「淳薄 既に源を異にし、旋ちにして復た幽蔽に還る（淳薄既異源、旋復還幽蔽）」は村人の淳朴さと俗世の浮薄さとの隔絶を指摘するものである。このように、「詩」では「漁人」個人を問題にするのではなく、彼の狡猾な言動を俗世全体に共通する悪弊と捉えて批判しているのである。

このことを踏まえて表2を振り返ると、確かに（4）の時点では「約束を破ることはよくない」、「欲を出すことはよくない」という「漁人」の個人的な倫理の欠如が問題にされているのに対し、（8）では「漁人」ではなく「俗世」へと批判の対象が変わっていることに気づく。これは明らかに「詩」の見方に拠ったものであり、教訓の物語から社会批判の物語へと読みが変化したと言えよう。「記」を読んだ（4）の時点で「俗世に対する批判」としていた者が4名であったことからすれば、いかに「詩」の影響が大きかったかは明らかであろう。

また「理想郷・隠逸への憧れ」・「村人の純粋さ・淳朴さへの憧れ」とする者も増加している。前述のように、「詩」を通じて村の生活への空想を広げることや、作者が関心を抱いていた村人への視点が追加されたことが、この結果に繋がったと考えられる[15]。

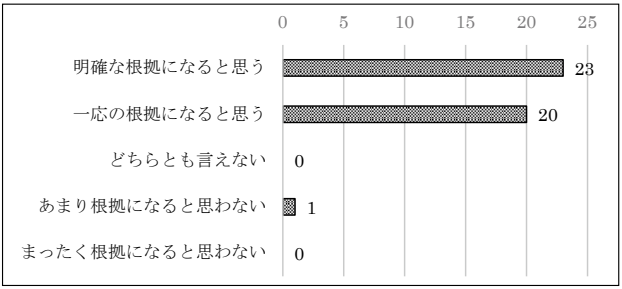
繰り返すが、「記」のみを読むとすれば、約束の破棄や強欲を誡める寓話として捉えてしまうことは、ごく自然なことである。しかしながら、作者陶淵明の撰述意図を探ろうとする場合、このような理解には疑問を抱かざるを得ないのである。ここで想起されるのは、同じく陶淵明の「盛年 重ねて来たらず、一日 再び晨なり難し。時に及びて当に勉励すべし、歳月は人を待たず（盛年不重来、一日難再晨。及時当勉励、歳月不待人）」（「雑詩」十二首 其一）である。この詩句のみを見れば、寸暇を惜しんで刻苦勉励することを勧めたものであるかのように見える。しかし、実はこの詩句は「歓を得ては当に楽しみを作すべく、斗酒もて比隣を聚めん（得歓当作楽、斗酒聚比隣）」を承けたものであって、酒を飲んで遊び楽しむことを説いたものなのである。一部を取り上げ、他を隠すことによって生じる誤読の例として知られている。「桃花源詩」もまた多くの漢文学習者の目に触れることなく隠された状態にある。

これまで見てきたように、受講生たちは桃花源の村の生活を想像することやそこで暮らす村人たちに注目すること、

作る授業に活かされるであろう。

多くの教科書がそうであるように「桃花源記」を陶淵明の作品として扱うのであれば、以上のように作者とともに読むことが最適の形ではないかと思われる。[16]「詩」こそがそのための有力な手掛かりなのである。最後にアンケート（Q４）の結果を示しておこう。これは「桃花源記」の撰

図４　アンケートQ４:「桃花源記」の撰述意図を考える上で「詩」は根拠になるか（クラス１・２合算）



「漁人」が再訪不能となった理由を考えること、そしてなぜ「桃花源記」という形で不思議な村の話が書きとめられなければならなかったのかということ等、「詩」を併せ読むことによって、言わば作者陶淵明とともに「桃花源記」を読んできたのである。今回の試みは受講生にそのような体験をさせるものであった。彼らは教師を目指す人々である。関連教材による読みの変化を自ら体験したことは、必ずや彼らが述意図に限定したものであるが、ほぼ全員が「詩」を「明確な根拠」「一応の根拠」になるとしている。これまで述べてきたワークシートの分析結果とともに、このアンケート結果もまた筆者の考えを有力に支持するものである。[17]

四、結び

本稿冒頭に示した新しい「学習指導要領」の方針に沿って、今後は「他の作品」との関係を踏まえた教材開発が進むと想像される。言うまでもないことであるが、「他の作品」と組みあわせること自体が目的なのではない。組みあわせることによって、ある教材の理解にどのように資するか、という点が重要なのである。したがって、本稿では省略したが、本来は単元や授業の目的等に即して、関連教材を利用することの妥当性から検討されるべきなのである。その場合、本稿に些かでも貢献する部分があるとすれば、それは学習者が自己変革を起こしたという点である。今回の調査では、学習者同士による話し合いの時間は設けていない。各自が独力で読みを変化させたのである。本稿はひとつの事例に過ぎないが、関連教材によっては、このように学習者自身の考えの形成に資する働きがある、ということである。もしも、彼らが「桃花源記」をめぐる様々なテーマで話し合いをするとすれば、単なる印象ではなく、陶淵明の詩文を根拠とした議論を展開できるであろう。その

意味でも、関連教材の研究は今後ますます重要になるように思われる。

注

（1）「関連教材」とは教科書本文と関連のある詩文のうち、補助的・発展的な教材や既習教材として用いられているものを指す。例えば、同一の書籍における教科書本文以外の章段、同一作者の他の作品、異なる作者の類似作品、後世の批評・注釈・翻案などである。なお、以後は「桃花源記」を「記」、「桃花源詩」を「詩」と略称する。

（2）このことについては、拙稿「日中古典教育における関連教材の比較」（『新しい漢字漢文教育』73号、二〇二二年十一月）を参照されたい。

（3）注（2）所掲の拙稿「日中古典教育における関連教材の比較」および拙稿「中国の古典教育における関連教材の意義について」（『教育実践学論集』22号、二〇二一年三月）を参照。関連教材を利用した設問の数は、義務教育8～9年級（日本の中学2～3年生に相当）では暗誦（25題）や単語（19題）に関する設問に次ぐ15題である。

（4）胡雲「人民教育出版社版 高級中学語文 古典詩詞の研究討論と練習の分析探究（人教版高中語文古詩詞研討与練習分析探究）」（『文学教育』、二〇二〇年三期）、路亜存「教育部組織編著版 初級中学語文教材 古典詩文練習システムの運用方策研究（部編版初中語文教材古詩文練習系統的運用策略研究）」（『新課程』、二〇二二年二十三期）を参照。両論考ともに教科書本文に附された設問についてどのような指導が行なわれるべきか、という観点から自主性の育成に対する言及がなされている。

（5）注（3）所掲の拙稿「中国の古典教育における関連教材の意義について」を参照。

（6）議論の概要については、門脇廣文『洞窟の中の田園 ―そして二つの「桃花源記」』（二〇一七年、研文出版）第3部第1章「従来の『桃花源記』研究の概要」および第2章「従来の『桃花源記』研究の問題点」を参照。

（7）高等学校国語教科書における「記」という文体の説明の調査結果については、拙稿「空想する「桃花源記」―「桃花源詩」とともに読むことの意義―」（『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』179号、二〇二二年二月）を参照。

（8）拙稿「『桃花源記』と『桃花源詩』と―その関係についての一考察―」（『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』178号、二〇二一年十一月）を参照。

（9）調査に当たっては、岡山大学研究倫理審査専門委員会（二〇二二年七月六日、課題番号11）の承認を得ている。

（10）本稿では清の陶澍注『靖節先生集』十巻（一九五六年、文学古籍刊行社）を底本とする。但し旧漢字体は常用漢字体に改めた。書き下し文、現代語訳は拙訳による。以下、同じ。

（11）注（7）所掲の拙稿「空想する『桃花源記』―『桃花源詩』とともに読むことの意義―」を参照。教育部組織編『義務教育教科書 語文』8年級下冊（二〇一七年教育部審定、本稿では二〇二一年八月第5次印刷に拠る）に「桃花源記」が収載されている。

（12）なお、クラス1とクラス2との回答傾向の相違については、種々の検討を試みたが、ワークシート・アンケートともに特に顕著な差異は見られなかった。三―二以下の項目についても同様であった。

（13）本稿では論じる余裕がないが、他の志怪小説と組みあわせることによって「記」の特徴を明らかにしてゆく、という授業構想も考えられる。但し、その場合は陶淵明の作品として扱わない方がよいであろう。

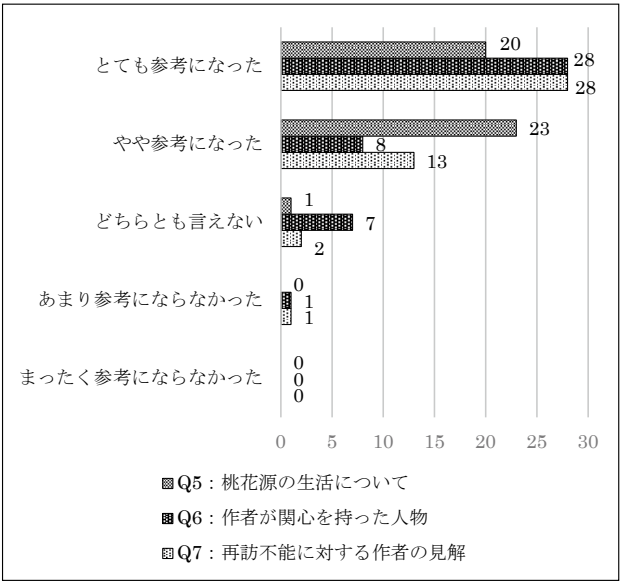
（14）「淳薄既異源」を「旋復還幽蔽」の原因・理由として解釈するものとしては、斯波六郎『陶淵明詩訳注』（一九八一年、北九州中国書店。初版は一九五一年、東門書房。本稿は一九八一年版に拠る）に、「淳薄 既に源を異にすれば」と訓じ（360頁。傍点は筆者。以下、同じ）、語釈26に「桃花源の人は純真であり、俗界の人は浮薄であり、全く根本的に異なるから」としている（362頁）。また、都留春雄・釜谷武志『陶淵明』（鑑賞中国の古典13巻、一九八八年、角川書店）も「淳朴と軽薄とそれぞれの風俗はもとから異なっているのだから、たちまちにまた世間から覆い隠されてしまった」と訳している（347頁）。中国においても、袁行霈『陶淵明箋注』（二〇〇三年、中華書局）に「桃源と世俗とでは、淳朴さと薄情さとが異なるため、この不思議な村は現れた直後にまた隠れてしまった、という意味である（意謂桃源与世俗之間、淳厚与澆薄既然不同、所以此神界顕露之後随即重新隠蔽矣）」と説明を加えている（489頁）。

（15）特に「村人の純粋さ・淳朴さへの憧れ」とする回答が出たことは注目に値する。思うに、教訓を垂れる作者像と、理想や純粋さへの憧れを語る作者像とを比較した場合、我々が素直に共感できるのは後者ではあるまいか。このような作者像の形成を無意識に見落としてきたところにも、漢文離れの一因が潜んでいるように筆者には思われる。

（16）注（7）所掲の拙稿「空想する『桃花源記』―『桃花源詩』とともに読むことの意義―」において調査した教科書（国語総合3社、古典B6社）では、全て『陶淵明集』を出典としていた。

（17）この他にも、本稿第三節で取り上げてきた各項「桃花源の生活について」、「作者が関心を持った人物」、「再訪不能に対する作者の見解」それぞれについても、考えを形成する上で「詩」が参考になったか、というアンケートを取っている。図5（次頁）を見れば、程度の差はあるものの、各項目について考える際に、ほとんどの学習者が「詩」に依拠していたことが窺い知れる。この結果も補強材料になるであろう。

図５　アンケートＱ５～７：考えを形成する上で「詩」は参考になったか（クラス１・２合算）



附記１

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金（20K02886）による研究成果の一部である。

附記２

本稿脱稿後に、馮順其・林暉・魏賢君・符芷盈「『桃花源記』と『桃花源詩』との読み比べ教育の実践探求（『桃花源記』与『桃花源詩』対読教学実践探索）」（『教師』二〇二二年第二十六期）があることを知った。「記」と「詩」とを相互補完的に取り上げた実践の記録として興味深い。中国においてもこのような取り組みが進められていることは、筆者の意を強くするものである。

（本学研究科・学部　教員）